

講義6 教会論・恵みの手段と礼典

テキストリーディング

藤本満 『ウェスレー』 325頁から359頁 10章 教会論 11章の洗礼の項

学習者の目的

- ① ウェスレーの恵みの手段の大系を理解する
- ② ウェスレーの洗礼理解を明確にする

10章 教会論 要約

ウェスレーはアングリカンの高教会主義に強く影響を受けた。生涯国教会員としてとどまりたいと願う。しかし、モラヴィア派との出会いにより、彼らが使徒継承は受けていないにしても使徒体験を有していたことはショックであった。またベヴァリッジを読むことによって厳格な教会観が緩み始めた。(藤本 326頁)

キリスト体験＝御霊の働きかけによって罪のまどろみから呼び覚まされ、神より生まれ変わり、霊の訓育を受けて聖潔に成長する。これが聖書的キリスト教 (藤本 326頁)

キリスト教は本質的に社会的な宗教(social religion)であり、世にかかわりをもっていくことが重要。孤独の宗教とすることは宗教を破壊すること。教会の起源は、神によって呼び出された数人が心の一つとして一つ所に集まった。(藤本 327頁)

教会の本質は、信仰者でもある。また教会とは、信仰者の会衆であり、そこにおいて純粋な神の言葉が説かれ、礼典が正しく執行される。(この定義は重要)

ウェスレーの教会の定義は、制度や、職権や、教理の観点からでなく信仰者と信仰の実質という角度からなされる。(藤本 329頁)

メソジストの使命

ウェスレーは監督制を拒否したのではない。監督制は聖書的と考えていたが、その制度が教会を治めるべき唯一の形態とは言えない。(藤本 331-332頁)

ウェスレーは新たに発展させたもの

- (1) 野外説教
- (2) その場での自由な祈り
- (3) ソサエティーの組織
- (4) 司教の按手 (藤本330頁)

教会政治形態理解の変遷

1746年 キングの『原始キリスト教会の憲法、条例、一致、礼拝』および素ティリングフィールドの『イレニクム』と出会い、国教会の司教・司祭・執事という教職制度でさえ、聖書に定められていないことに気づく。監督制の絶対性が崩壊していった。(藤本 331頁)

メソジストは、既存の教会の通常の(ordinary)働きでは手の届かないところを助けるために、神によって結成された特殊な(extraordinary)福音舞台であるという意識。(藤本 333頁)

メソジストの目的

メソジストを神がおこしてくださった目的は国民を、地区に教会を改革すること、即ち聖書の聖化を国中に広めること。ウェスレーは国教会からは分離しないが、必要な場合は体制を変更する行動をとることを念頭に置いていた。(336頁)

ウェスレーの引用

恵みの手段について、私は、それが、外的なしるし、言葉、行為であり、神によって定められたものであり、神が人々に、先行し、義とし、聖化する恵みを伝える一般的なチャネルであります。・・・神の恵みの望むものは主が与えられた恵みの手段を使用しながら待つのです」と語ります。 Jackson 5:189.

この言葉から理解できることは、ウェスレーは恵みの手段をクリスチャン生活の全生涯にかけて必要なものであると言っていることです。クリスチャンは、恵みの手段を積極的に用いながら、クリスチャン生活を発展させていくのです。

「それ故、もしキリストの明快な命令に関心があれば、もし私たちの罪の赦しを望むならば、神を信じ、愛し、従う力を望むなら、主の晩餐を受け取る機会を逃さないようにしないといけません。」絶えず聖餐に与る義務 Outler p.336

ウェスレーの聖礼典理解

キリストによって定められた聖礼典は、単なるキリスト者信仰のバッジや証拠ではない。それは恵みのしるし、すなわち神の我々に対する好意のしるし(外的なしるし)であり、それによって神は目に見えない形で我々の内側に働きかけ(内的な恵み)、信仰を起こすばかりか、それを強め、確かなものとする。福音の時代に我らの主によって定められた聖礼典は二つあり、それは洗礼と聖餐である。

ウェスレーにとって聖礼典は「内的な恵みの外的なしるし」聖礼典は可視的な「しるし」と不可視的・霊的な「実質」の部分から成り立っています。ウェスレーの場合、形式的に聖餐や洗礼を受けるだけでは不十分なのです。実質的な部分である神の恵みの受領が聖餐や洗礼においては問われています。

ウェスレーの恵みの手段

一般的な恵みの手段

- 神の命令を守る
- 自己否定
- 十字架を取る
- 神の臨在に与る

神によって設立された特別な恵みの手段

- 祈祷
- 聖書の探索

主の晩餐

断食

キリスト者の集い

注意深い恵みの手段

クラスの集い 小グループ

祈祷会

契約礼拝、徹夜祈祷会

愛餐：証しの礼拝

病気の方々を訪問する

できるだけ良い行いをする

デボーションの古典を読む

ウェスレーの恵みの手段大系 (心と生活のホーリネスを獲得する為に)

心のホーリネス 敬虔の業 個人的	信仰規則 キリストに倣う πρὸς ἁγιασμοὺς 共同体的	生活におけるホーリネス 慈愛の業
祈祷 聖書を読むこと 黙想 断食 日誌をつける 告白 節制	礼拝 聖なる会話 聖餐 集会 (バンド・クラス・ソサエティ) 説教	病める者の訪問 給食活動 貧しい人々の教育 貧しい人々に与える シンプルライフ もてなし 証しする 刑務所への牧会 社会正義 天職

ウェスレーには敬虔の業から慈愛の業へと順番があります。以前は恵みの手段においては、敬虔の業の範疇に、個人的、共同体的な恵みの手段もいれていましたが、最近の研究では、中央に共同体的な恵みの手段をいれる研究者が多くなりました。私もこの立場です。というのも、敬虔の業において個人的な心と霊の修養を受けたものが、社会的責任を果たす時に、ともすれば、社会的責任をすることにおいて疲れ、燃え尽き症候群になる人も多いのです。そのようにならない為には、どこかで自分の信仰を確認し、前進していく

恵みの手段が必要なのです。このことにより人は、全ての生活において恵みの手段を用いて天国への旅路を行うことができるのです。

聖餐は自己の本当の姿に気づかせ、悔い改めの恵み(Convincing grace)へもたらす。悔い改めの恵みにより、人は神からいかに離れているかに気づく。人は、真実に悔い改めて、愛において生かされる時にキリスト者は恵みにおいて成長することができる。 共同体的恵み 敬虔の業と慈愛の業の媒介としての聖餐を強調しました

救済事業と社会正義

救済事業

メソジストの人々は貧しい人に与え、貧しい人々と生き、貧しい人を好みました。これがウェスレーにとっての聖書に基づき、神学的に健全な原則でした。それは現実の人々との接触によってなされたものであり、ウェスレーは、それらの人々をキリストの名において愛しなさいと語った人々でした。

社会正義

ウェスレーは給食活動、衣類を与えること、貧しい人の世話をすることに興味を持っただけでなく、彼らを貧しくしている社会構造そのものを修正し、改革することを強調しました。そのような抑圧的な構造を墮落の結果からくる世界の悪の不幸な結果だとすることは十分ではないと考えました。行為、特に意図的な行為は、社会正義として知られるようになるものですが、ウェスレー神学の中心なのです。

述べてきたように、ウェスレーは抑圧され、貧しく、社会から疎外されている人の側に立ちました。ウェスレーの個人と社会の幻は、解放というテーマがあるのです。このような楽観主義から流れ出る、この世において罪の力から解放されるとか、社会的な解放をある階級や周辺化された人々に伝え、メソジストの民が人間の自由のために働くことを要求しました。ジョン・ウェスレーによって教えられ、生きられたホーリネスと全き愛は、過去のことでなく未来を切り拓くことであり、私たちが社会的にも責任を果たしていくことにつながるものです。その意味で、社会的な聖化概念をウェスレーは持っていたということができるでしょう。敬虔の業によって自己修養したものが、共同体的な恵みの手段を通して自己の信仰を確認し、確信を与えられ、慈愛の業へとつながる立場です。

洗礼の項

ウェスレーは、若い頃オックスフォードでは礼典主義者と呼ばれていた。ラッテンベリーは、ウェスレーを礼典的福音主義、福音的礼典主義と呼んでいます。どのような点において福音的で、かつ礼典的なのでしょうか。

聖礼典は、可視的な〈しるし〉と不可視的な〈実質〉からなる。(藤本 348頁)

洗礼は単なる信仰告白の公の形態ではないし、既にどこか別の場所で新生を体験しているものが、その体験を礼拝式において象徴的に表現するものでもない。洗礼は霊的実質を受ける手段、それを運ぶ管。そこに約束されている実質とは、“聖霊による再生”である。洗礼がキリスト者としての発起的礼典であるのに対して、聖餐は生まれ変わった生命を保持し発展させるもの。(藤本 349頁)

ウェスレーは洗礼による再生を当然と考えるアングリカンの伝統的な神学の中で教育を受けていた。(藤本 350頁)

信仰による回心・意識的な新生を体験し、その必要性を固守したウェスレーが、他方で、“幼児洗礼は教会において維持されるべきである”と幼児洗礼を擁護している。ウェスレーはそこで、〈洗礼による再生〉を堅持している。(藤本 352頁)

〈洗礼による再生〉と成人の悔い改めと信仰に基づいた〈福音的回心〉の両方を堅持するウェスレーは矛盾しているのかというのが一般的。

ウェスレーは洗礼において実質的に何かが起こる。我々が再生され生まれ変わることが起きると考えていました。(藤本353頁)

しかし、洗礼という行為自体が即、自動的に新生につながることは否定していました。(藤本354頁)むしろ洗礼というものを新生を喚起する定例の手段と考えている。(藤本355頁)受洗者が悔い改めをせず、信仰を有していなかった場合、受洗者の側で礼典の高価を妨げてしまう。(藤本355頁)

このことは聖餐においても同じ。ウェスレーは聖餐においても、聖餐受領者の準備が重要であると考えていました。それは彼が信受者主義(Receptionism 聖餐式において聖別禱のちにパンとぶどう酒は変化しないでそのまま止まるが、信仰を持って受ける信受者はそのパンとぶどう酒と一緒にキリストの体と血を受け取るという説。)に近いと言われていることにもあらわれています。

幼児洗礼について

幼児洗礼の場合は、自分の意志を働かせて恵みを拒否して、神の働きを否定することはできないので、洗礼と新生は合致する。(藤本 356頁)

ウェスレーは幼児洗礼と宗教教育による〈子どもの救いを〉真剣に考え、両方の手段をメソジズム運動の中で実践していた。しかしながら、幼児の時期に洗礼を受けたものが、神

の道ではなく自我とサタンの道を、きよめの道ではなく罪の道を歩いている現実もあった。それが彼のアルメニアン神学の所以。(358頁)

私たちが幼児に洗礼を施す時、同時に神の重要な性質を共有しているのです。私たちは、神の先行する恵みの現実における共通の信仰を宣べ伝えるのです。子どもに洗礼を受ける時、神ご自身が、子どもに深く、永続する方法において、私たちが尋ねたり、想像する以上にかかわっておられるのです。私たちはその洗礼が、新しい契約のしるしとして、子どもに対しても神の約束のしるしなのです。

信仰者の洗礼

キリストのしるしを保持する

キリストの死を共に味わう

キリストが歩まれたように歩む

キリストの聖霊を受ける

キリストの体の一部となる。

ウェスレーは聖餐について以下のように記します。

主の晩餐は、先行し、義とし、聖化し、保持したりする恵みの手段であり、人々の必要に従って神によって制定されたものです。制定された対象者は、神の恵みが欠けていると感じている者であり、罪から解き放たれたいと願い、罪の赦しを示されるか、神の像に向かって魂を刷新したいと願う者であり、主との交わりによって臨在を深く感じたいと願っている者です。どのような適合性も必要ではなく、ただ、自分が全く罪深い存在であり、キリストから離れて助けようのない状態であると自覚していればよいのです。それ故に、もしあなたがそのような恵みを欲すると願うならば、信仰において近づき、慰めと力を見出しなさい。一般的な恵みの手段に参加することなく、歩みにおいて成長することは不可能です。しかしウェスレーにとって聖餐は、最も重要な手段であり、それを怠ることは考えられないことです。

資料10 説教6「恵みの手段」を読みなさい。